

| | |
|------------------|---|
| Title | 山部赤人九四五番歌「都太の細江」考：『万葉集』の表現を中古の表現から見ることの可能性 |
| Sub Title | |
| Author | 田口, 尚幸(Taguchi, Hisayuki) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 2013 |
| Jtitle | 三田國文 No.57 (2013. 6) ,p.1- 10 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.20130600-0001 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山部赤人九四五番歌「都太の細江」考

——『万葉集』の表現を中古の表現から見ることの可能性——

田口 尚幸

I 序

本稿は、山部赤人による『万葉集』九四二―九四五番歌すなわち辛荷島歌をとりあげ、その第三反歌に出てくる地名「都太」(原文「都太」)がなぜ詠み込まれたか、あるいは、「都太」という地名表現にいかなる含意性があるか、といった問題を考察するものである。『万葉集』の表現を中古の表現から見ると「能性」という副題をつけたとおり、時代の下る中古から上代を見て考察するかたちをとる。

まずは、辛荷島歌の本文を示す。

辛荷の島を過ぐる時に山部宿禰赤人が作る歌一首并せて短歌

あぢさはふ妹が目離れて　しきたへの枕も枕かず　桜皮巻
き作れる船に　真相貫き　我が漕ぎ来れば　(長①)
淡路の野島も過ぎ　印南都麻　辛荷の島の島の間ゆ　我家
を見れば　青山のそこも見えず　白雲も千重になり来ぬ

(長②)

漕ぎ廻むる浦のことごと　行き隠る島の崎々　隅も置かず

思ひそ我が来る　旅の日長み

反歌三首

(長③)

玉藻刈る辛荷の島に鳥廻する鵜にしもあれや家思はざらむ

(反①)

島隠り我が漕ぎ来れば羨しかも大和へ上るま熊野の船

(反②)

風吹けば波か立たむとさもらひに都太の細江に浦隠り居り

(反③)

赤人は、西下している。長②の地名表現を追ってみると、海路、「淡路の野島」↓「印南都麻」↓「辛荷の島」と進み、反①は、「辛荷の島に鳥廻する鵜」を見ての詠出。反②には地名がないものの、反③では、「辛荷の島」より東の「都太の細江に浦隠り居」たことを詠む。つまり、反③は過去の通過地点を振り返っているのである。では、わざわざ通過地点「都太の細江」を振り返るべき必然性はどこにあったのであろうか。

辛荷島歌に関する先行研究とその問題点、および、私の表現方法論の詳細は、前稿「山部赤人の辛荷島歌の表現方法―『万葉集』九四二―九四五番歌に見る〈三連転換〉〈中央特立〉と

その「相似反復」(拙著『万葉赤人歌の表現方法 批判力と発想力で拓く国文学』平22・3鼎書房)に譲るが、反①②③についてかいつまんで言えば、私は、反③が現地に「浦隠り居」の詠出であることを静止画にたとえ、反①・②も交えて、静止画/動画/静止画で「中央特立」するメリハリを指摘した(「中央特立」とは、三つのうちのまんなかが際立つことを意味する)。まとめれば、次のようになる。

反①…現地に棲む「鵜」を見ての詠出⇨静止画

反②…西下して「来」て、東上する「ま熊野の船」を「羨」न्दの詠出⇨動画

反③…現地に「浦隠り居」て、すなわち、完全停止しての詠出⇨静止画

加えて、

反①…現地の「鵜」への同化願望

反②…家郷の「大和へ上るま熊野の船」への「羨」望

反③…現地で「浦隠り居」る心「細」さに集中

と言えるところから、向現地意識/向家郷意識/向現地意識という、意識が向かう先の「中央特立」⇨メリハリも指摘した。要するに、現地での完全停止および向現地意識を示す反③は、全体的メリハリを計算して必然的にそこに置かれた「注1」、と考えるのであるが、一応、前稿では、

なぜ数ある通過地点のなかで反③「都太の細江」(用字「都太乃細江」)が選ばれたか

という問題に関して、「注23」で、

私なら、鄙にいるのに「都太」、および、「都太」なのに

「細江」、といった言葉遊びの可能性を考ると言及した。

本稿は、この言及を補足するものである。具体的には、上代の『万葉集』と中古の『伊勢物語』の表現の共通性に注目し、「田舎に居るのに『都』」といった面白みをねらった地名表現として、「都太」をとらえる「注2」。

注1 前稿では、反①②③のみにとどまらず、長①②③も含めての全体的メリハリを説いている。

2 「太」と「細」の対比に関しては、補足し得るアイデアをもたない。

Ⅱ 辛荷島歌における地名表現の含意性

ただし、「万葉集」の表現を中古から見ることの可能性を説く前に、おさえておきたいことがある。「都太」という地名表現の含意性を説く場合、辛荷島歌における「都太」以外の地名表現すなわち「淡路」「印南都麻」「辛荷」(原文「淡路」「伊奈美婦」「辛荷」)に含意性が認められるか否かは、気になるところである。もしほかの地名表現に特別な意味⇨含意性が認められれば、「都太」のみ含意性なしとは考え難くなる。「淡路」「印南都麻」「辛荷」の含意性に関しては、前稿で先行研究を紹介・首肯したけれども、ここで改めて紹介しなおし、私なりの補強も加えておこうと思う。

犬養孝「辛荷島歌考―赤人美の構造の一面―」(『万葉の風土 続』昭47・1塙書房は、阪口保「南毗都麻考」(『萬葉地理研究

兵庫篇』昭8・4白帝書房)を踏まえ、

「辛荷」の「辛し」に掛けてある

と指摘する。犬養は『万葉の旅 下』五五頁や『万葉のこたま』昭57・4PHP研究所二六九頁でも「印南都麻」に言及しているが、よりわかりやすく詳しいものとしては、次にあげる神野富一『万葉の歌 人と風土 ⑥兵庫』昭61・9保育社二〇〇頁がある。

「印南都麻」には原文「伊奈美婦」の用字からも察せられるように、「否み妻」の連想があり、そして否み妻は「辛し(つらい)」というつながりで「辛荷の島」へと接続していく

— 中略 —
さらに、「淡路」にも「妹に)逢ふ」が掛けられているだろう。

— 中略 —
航程の叙述のために選ばれたのが、妻を連想させる淡路以下の地名なのである。

「淡路」「印南都麻」にも、辛さに至るまでの妻との関係がほめかされているとするのである。犬養も、神野も、用字や響きに込められた地名表現の含意性を看破しており「注3」、卓説として首肯できる。

ちなみに、神野は、『万葉の歌』一八〇頁では、長②「淡路の我家を見れば」と並んで、

波の上を 行きさぐくみ 岩の間を 行きもとほり
稲日つま 浦廻を過ぎて 鳥じもの なづさひ行けば

という丹比真人笠麻呂五〇九番歌をとりあげ、

「淡路」・「粟島」・「家の島」と、「妻に)逢ふ」・「家」など家郷にゆかりの響きをもつ地名を点綴する中に、当の「稲日つま」も詠みこまれている。

と説いている。これを踏まえて長②「淡路」「印南都麻」を見ると、一層神野説に頷くことができる。

もう一点、屋上屋を架すことになりそうではあるが、私なりの補強も加える。とりあげるのは、

昔より言ひけることの韓国かんとくの辛くもここに別れするかも
という『万葉集』三六九五番歌である(「韓国の辛くも」の原文は「可良久尔能可良久毛」)。『新編全集』の訳を見ると、

昔から 言い伝えられたように 韓国の からく辛く
もここで お別れをすることか
とあり、頭注には、

言ひけることの—このコトは諺の意。ノは、くのように、の意。「韓」と「辛」とが同音であることを利した韓旅の苦難を語る伝承があつたのであろう。

辛くも—この辛しは—中略—別れの辛さを表す。
とある。この三六九五番歌は、辛荷島歌の「辛荷」に「辛し」すなわち辛さを読みとる犬養説を、類例として補強し得る。そもそも、「辛荷」とは、『播磨国風土記』梶保郡に、

韓荷嶋 韓人、船を破りて、漂へる物、此の嶋に漂い就き
き。故、韓荷嶋と號く。

とあるところからすると、本来は「韓荷」であり「注4」、それを赤人が辛荷島歌において「辛荷」に変えたと考えられる。と

すれば、まさに、「韓」↓「辛」シ^{かろ}シ^{つろ}の三六九五番歌に通じ、三六九五番歌によって辛荷鳥歌の「辛」の含意性が補強される。

以上、「都太」以外の地名表現「淡路」「印南都麻」「辛荷」には、含意性が認められた。従って、「都太」のみ含意性なしとは考え難い。次節からは、「都太」に含意性ありとして、論を進める。

注3 用字に特別な意味を込める例としては、拙著『万葉赤人歌』第四・七章でとりあげた吉野讃歌第一歌群の「象」や春日野歌に見られる「容」が、同様の含意性と考えられる。

4 現在の地名も、「韓」に通じる「唐」を用いた「唐荷」である。

Ⅲ 『万葉集』の「都鳥」「都太」を『伊勢物語』九・一一五段から見る

地名表現「都太」に含意性があるとすれば、その含意性は、一体、どのようなものであるか。前々節で述べたとおり、私は、「田舎に在るのに『都』」といった面白みをねらったものと考ええる。本節では、はじめに、『万葉集』四四六二番歌の「都鳥（原文「美夜故杼里」）と『伊勢物語』九段第三部の「都鳥」の共通性に注目する伊藤博『釈注』の指摘を紹介・首肯し、次に、辛荷鳥歌反③「都太」と『伊勢物語』一一五段「都鳥」の「都」の共通性に注目して、「田舎に在るのに『都』」といった面白みをねらった地名表現として「都太」をとらえる。

『万葉集』四四六二番歌は、

舟競ふ堀江の川の水際に来居つつ鳴くは都鳥かも

という歌である。伊藤『釈注』は、四四六〇―四四六二番歌の作者を「四四五七の歌を詠んだ主賓、兵部少輔大伴家持」と考える。そして、作歌事情に関し、

太上天皇行幸先の難波堀江において、兵部大丞大原今城が誦誦した歌（四四五九左参照）に刺戟されながら詠まれ

たとか、

難波堀江をめぐる望郷歌で、四四五九の歌に応じて詠んだとか考えた上で、次のように述べる。長くはなるものの、重要箇所ゆえ、そのまま引用する。

筆者なりに目下の歌をくだいて理解すれば、

舟が漕ぎ競う堀江の川の水際、この水際に降り立ち群れ居つつミヤミヤと鳴き立てるのは、都鳥なのかなあ。ああ、鳥までが都を慕うて鳴いている。（四四六二）

ということになる。家持は、「都鳥」という鳥がいることは前々から知っていたはずである。眼前でミヤミヤと鳴く鳥を見て、都に思いを寄せる我が身から、あれが聞き知る都鳥なのか、自分の今の思いと同じなのだなあと、感慨に耽ったものと思われる。結句の「都鳥かも」の「かも」は、『新編全集』に「何々ハ」（体言）に対応して「文末がカ（モ）・カヤなどで終る形式は、疑問か、反語か、詠嘆か、分らない」とあるとおり、判断がむづかしい。だが、

歌の流れから見て、疑問の中に詠嘆のこもる用法と見て狂いはあるまい。「ミヤミヤと鳴くから都鳥なのだなあ」（詠嘆）では郷愁にならない。

このように見てくると、今の歌は、『伊勢物語』第九段に、なほゆきゆきて、武蔵の国と下総の国との中に、いとおほきなる河あり。それを角田河といふ。その河のほとりにむれるて、「思ひやれば、かぎりなく、遠くもきけるかな」とわびあへるに、渡守「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、み名人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも、しろき鳥の嘴と脚とあかき、鳴のおほきなる、水のうへに遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なればみ名人知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こそりて泣きけり。

と語る切実な話の先蹤をなすことが知られよう。業平の「都鳥」が家持の「都鳥」と同種か異種かは問う必要がない。いずれの鳥も、ミヤと聞こえるその声から名づけられ、都人はそのミヤコを我が身に引きつけて「都」と思ひなしたのであるから、人びとは、その根幹のところ、家持と業平とで相通うことだけを知ればよいのである。

『伊勢物語』を引くのなら、正確には「業平」ではなく「男」「昔男」「主人公」などと呼ぶべきであろうし、「業平」と呼ぶ

のなら、『伊勢物語』九段第三部ではなく『古今集』四一一番歌を引くべきであろうが、重要なのは、既に伊藤『釈注』が『万葉集』の表現を中古の表現から見ている、ということである。先学は、『万葉集』四四六二番歌を『伊勢物語』九段第三部すなわち東下りの一コマから見ている。慧眼と言えよう。

ちなみに、また前節同様屋上屋を架すことになってしまいうではあるが、私なりの補強も加えておく。難波行幸從駕に際しての懐郷の念の詠出としては、『万葉集』に、

葦辺行く鴨の羽交ひに霜降りて寒き夕へは大和し思ほめ
という六四番歌や、

大和恋ひいの寝らえぬに心なくこの洲崎廻に鶴鳴くべしや
という七一番歌を見出し得る。これらの懐郷の念をもとに四四六二番歌を見るならば、伊藤『釈注』の指摘どおり、「ミヤミヤと鳴き立てるのは、都鳥のかなあ。ああ、鳥までが都を慕うて鳴いている」という「望郷歌」であろうし、『伊勢物語』九段第三部の「先蹤」であろう。

ならば、辛荷島歌反③「都太」はどうか。『万葉集』四四六二番歌と『伊勢物語』九段第三部には、「田舎にいるのに『都々』といった面白み」と、「都」に対する懐郷の念が、ともにあった。一方、「都太」の場合は、「田舎にいるのに『都々』といった面白み」はあろうけれど、「都」に対する懐郷の念となると、どうであろうか。前々節で紹介したとおり、「田舎にいるのに『都々』といった面白み」をねらって「鄙にいるのに『都太』」なのであろうが、全体的メリハリからすれば、反③にあるのは向現地意識であり、「都」に向けての向家郷意識で

はない。前稿においても、

反③になると、向家郷意識のなさが徹底してくる。「浦隱り居」る心「細」さという向現地意識に集中し、懐郷の念を示さない。

と述べた。「都」に対する懐郷の念があるのは、向家郷意識が「羨」望として噴出する反②であり、反③は言わばその引き立て役と考えられる。とすれば、反③では「都」に対する懐郷の念は読まず、「田舎に在るのに『都』』といった面白み」を読む程度にとどめるのが妥当と思われる。

では、「都」に対する懐郷の念が強くなり、それでいて「田舎に在るのに『都』』といった面白み」をねらっている表現は、辛荷島歌反③以外にあるであろうか。ここで注目されるのが、やはり『伊勢物語』の一一五段にある「都島」である。

本文は、次のとおり。

昔、陸奥の国にて、男、女、住みけり。男、「都へいなむ」と言ふ。この女、いと悲しうて、馬のはなむけをだにせむとて、おきのゐて都島といふ所にて、酒飲ませて詠める。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきは都島辺の別れなり
けり

田舎女が、都出身とおぼしき昔男に向けて、「おきのゐて都島」という地名を詠み込んだ歌を贈っている。訳せば、次のようになる。

おきび
篝火おきび赤く燃えた炭火がくつついて身を焼くよりも悲しいのは、この都島あたりでのあなた様とのお別れですよ。

『伊勢物語』の昔男と言えば、田舎および田舎人に対し馴染め

なかつたり侮蔑したりするイメージがあるが、実は、例外なくそうなのではない。「必然的な死を迎える昔男—伊勢物語一—五—一二五段に見る妥協・諦観・終焉—」（拙著『伊勢物語相補論』平15・9 おうふう）や拙著『伊勢物語入門』平16・6 鼎書房一三三—一三七頁で述べたとおり、老いが感じられる一—五・一一六—一二三段などは例外となる。一—一六・一二三段には、ミヤビのアイデンティティー喪失あるいはヒナビへの決定的妥協が認められ「注5」、一—一六段およびその直前の一—一五段には、田舎女に対する侮蔑がない。一—一五段は、帰京宣言のある陸奥章段とは言え、同じく帰京宣言のある陸奥章段の一—四段とちがって、ミヤビ至上主義およびそれと表裏をなすヒナビ否定が認められない（若き日の一—四段には田舎女に対する侮蔑がある）。つまり、九段第三部や一—四段を含む東下り章段群ほどにはこだわりがなく、「都」に対する懐郷の念が強くないと言える。であるからこそ、「都島」については、「田舎に在るのに『都』』といった面白み」を讀みとる程度にとどめておきたいのである。

「都」に対する懐郷の念が強くなり、それでいて「田舎に在るのに『都』』といった面白み」をねらっている表現としてあげられるのは、一つは『万葉集』の辛荷島歌反③「都太」、もう一つは『伊勢物語』の一一五段「都島」。上代と中古。伊藤『釈注』が『万葉集』四四六二番歌を『伊勢物語』九段第三部から見たのと同様に、辛荷島歌反③「都太」は一—一五段「都島」から見ればいい。『万葉集』の表現を中古の表現から見る可能性」とは、このようなことなのである。

IV 藤原家之山池歌・真間娘子歌を中古から見る

『万葉集』の表現を中古の表現から見ると「可能性」について、関連して、辛荷鳥歌以外の赤人歌にも言及しておこう。拙著『万葉赤人歌』では辛荷鳥歌以外の赤人歌もとりあげており、『万葉集』の表現を中古の表現から見ると「可能性」ということ言え、山部赤人の藤原家之山池歌の表現方法『万葉集』三七八番歌に見る〈絞り込み〉とその〈同調〉や「山部赤人の真間娘子歌の表現方法『万葉集』四三一―四三三番歌に見る聞く歌としてのエンターテイメント性」が該当する。繰り返しにはなるものの、『万葉集』の表現を中古の表現から見る「可能性」というテーマのもとに改めて紹介することは、無益ではあるまい。よって、以下、必要なところのみ紹介する。

まず、不比等薨後の園池のさまを詠んだ藤原家之山池歌の本文を示すと、

山部宿禰赤人、故太政大臣藤原家の山池を詠む歌一首
いにしへの古き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり

となる。ここに詠み込まれた「水草」の用例は、上代ではごくわずかで、『万葉集』ではほかに一九〇八・二二七二番歌があるのみで、上代では『出雲国風土記』嶋根郡に「水草川」を見出し得る程度である。「水草川」が「水草」に由来する名であ

るとすれば、川辺に自然に茂るのは雑草ゆえ雑草を示唆しようが、『万葉集』の三例は「水草」の正体を判断する材料にはならず、結局、上代だけを見ている限り、決定的解決は望めない。そこで、私は、中古の『枕草子』『後拾遺集』『源氏物語』『古今集』『千載集』『蜻蛉日記』などの用例から、「水草」が園池の荒れを示すものであったり、排除すべきものであったり、顧みられない状態を象徴するものであったりすることを示し、雑草説を主張した。

そして、そうした雑草が生える背景に関して、
不比等が亡くなってからは庭園の管理に心を砕く人がいなくなったのであろうか。

――中略――

邸宅の主人自らが熱意を以て維持に当たらなければ、技術者の払底から大陸の渡来文化たる庭園は荒廃しかねなかったのではあるまいか。

とする金井清一「庭園」(『万葉の歌と環境』平8・5笠間書院)の指摘を引用した上で、次のように述べた。

私は、後代の『源氏物語』匂宮巻を思い出した。光源氏薨後の六条院について、子の右大臣夕霧が、自分の生きていく間だけでも荒廃させまい、と述べる場面だ(『新大系』では四巻二一四頁)。子が栄華のなかにあっても、金井の推測どおり、「邸宅の主人自ら」の「熱意」次第で荒廃しかねないこともある。雑草はすぐ成長するものだから、手入れされたなかでも雑草が散見される時はあったと思われる。不比等邸においても、手入れする間隔があき気味にな

つて、園池がやや荒れ、繁茂とまではいかなくても、水辺の雑草とおぼしき「水草」がちらほら目立つくらいの際はあつたらう。

これも、「万葉集」の表現を中古の表現から見る可能性」の一例と言えよう。

また、散見される雑草を歌に詠む感性に關しても、『枕草子』『後拾遺集』から考察することで答を導き出した。『枕草子』では、

女一人住むところは、いたくあばれて築土なども全からず、池などあるところも水草あ、庭なども蓬に茂りなどこそせねども、ところどころ砂子のなかより青き草うち見え、淋しげなるこそあはれなれ。もの賢げになだらかに修理して、門いたく固め、際々しきは、いとうたておぼゆれ。

という一七一段や、いつも、全て、池あるところはあはれにをかし。

—中略—

わざとつくるひたるよりも、うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間絶え間より月影ばかりは白々と映りて見えたるなどよ。

という卷末付載二七段、あるいは、おもしろき家の、木立焼け失せたる。池などはさながらあれど、浮草水草など茂りて。

という一五六段を紹介し、閑寂な趣を感じる感性があることを指摘した【注6】。そうした感性の例は『後拾遺集』にも見ら

れ、

池水の水草もとらで青柳の払ふ下枝にまかせてぞ見る

という七五番歌が該当する。「本来庭の池などの荒れ果てた様子を表現す」べき「みくさ」を「風情のあるものとしてとらえ直」す、「自然のままが風流であるという考え方」、といった犬養廉・平野由紀子・いさら会『後拾遺和歌集新釈』の解説を紹介し、閑寂説を補強したのであった。

一方、真間娘子歌は、『伊勢物語』九七段と関連づけた。九七段は、

昔、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそかりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりける翁、

桜花散り交ひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに

といった内容で、「翁」は昔男の歌に關しては、『集成』や『旺文社全訳古語辞典』【注7】の解説が本質を言い当てていよう。

前者一八〇〜一八一頁には、次のようにある【注8】。

当時の歌の披露は、一句一句ゆつくりと、特に上の句の終りでは、大きく息を休める形でなされていたであろう。

さくらばな ちりかひくもれ おいらくの—

初句に問題はないけれども、第二句の「散り：曇れ」は、不吉な匂いを漂わせた言葉である。四十歳を境として、以後を老人と考えるのが当時の習いであるが、だからこそ賀はめたい言葉ばかりを使うのが礼法である中で、これは賀の言葉としては異様ではなかつたらうか。まして第三句「老いらく」は、こんな場合タブーとすべき言葉ではない

か。「散れ—曇れ—老いらく」、「この不吉な言葉を連ねて、業平はいったい権力者に向って何を言おうとするのか。業平と藤原氏のことを知っている一同は、基経の顔をうかがいつつ、事の先行きにかたずをのむ思いであつたに違いない。

こむといふなる みちまがふがに

だが下の句は、人々の動揺をよそに、賀の歌としておさまつてしまった。公の席で、立派に賀の歌として通るものになつてしまった。

祝賀の流れを断つ第二〜三句「散り交ひ曇れ老いらくのは意外かつ衝撃的な展開で、緊張を一気に解く第四〜五句「来むといふなる道まがふがに」の言い逃れもまた意外である。

私は、この『伊勢物語』九七段収録歌の第二〜三句「散り交ひ曇れ老いらくのを、

我也見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城とところという真間娘子歌第一反歌の第一〜二句「我也見つ人にも告げむ」と重ね合わせ、意外性・衝撃力が共通することや、ともに享受者を引きつける力をもつことを指摘した。また、九七段収録歌の第三句と第四句の間が真間娘子歌第一反歌では第三〜五句「勝鹿の真間の手児名が奥つ城」に相当し、同じく「かたずをのむ」時間と考えられることを指摘したり、緊張を一気に解く九七段収録歌第四〜五句「来むといふなる道まがふがに」と真間娘子歌第一反歌末尾「ところ」が意外性の点で共通することを指摘したりした。そして、その上で、私が聞く歌としての真間娘子歌の表現方法に気づき得たのは『伊勢物語』の研究者

であったことが大きい、と振り返つてもみた。つまり、『万葉集』の表現を中古の表現から見たからこそ気づき、というわけである。

藤原家之山池歌と真間娘子歌。「万葉集」の表現を中古の表現から見る可能性」は、辛荷島歌以外の赤人歌に関しても言える。

注6 章段番号は『新大系』による。

7 「さくらばな…」の項で、第二・三句の「縁起の悪」と「人々」の「仰天」、第五句の「転」を述べている。

8 前節でも述べたとおり、『伊勢物語』を引くのであれば、正確には、「業平」ではなく、「翁」「昔男」「主人公」などと呼ぶべきであろう。

V 結 び

本稿は、研究余滴的なものではあるが、辛荷島歌反③にある地名表現「都太」の含意性の問題は、前稿に注や付記として入れるには量が多く、独立した論文として世に問わざるを得なかつた。

また、独立した論文にする必要性は、もう一つあった。古典文学の研究は、細分化される傾向にある。もちろん、前々節で紹介・首肯した伊藤『釈注』のようなすぐれた例外もあるとは言え、専門とする時代を超えての考察はなかなか行ない難いものであろう。実際、私自身、『万葉集』の表現を中古の表現から見る可能性」などと説くことは、ひどくおそろしい行為であ

った。しかし、もともと中古の『伊勢物語』を専一に研究してきた私が上代と近世で拙著各一冊〔注9〕を刊行する過程で痛感したのは、たとえ暴虎馮河であろうと叩き台となる先鋒はなければならぬ、ということであった。本稿もまたそうした叩き台になればと思い、独立した論文として世に問うことにした。専門とする時代を超えての考察が増える一助となれば、誠に幸いである。

注9 上代では専門書『万葉赤人歌』を刊行し、近世では注釈書『箏曲地歌五十選 歌詞解説と訳』平21・1邦楽ジャーナルを刊行した。